

## 1. はじめに

フィンランドの公共図書館、大学図書館におけるスペースの使い方などについてどのような工夫があるか、また、資料購入や保存の考え方についても今後のヒントを得たいと考え、研修に参加した。

## 2. 研修スケジュールおよび参加者

日程	訪問先（所在地）
2025/09/15（月）	ヘルシンキ中央図書館 Oodi（ヘルシンキ） アカデミア書店（ヘルシンキ）
2025/09/16（火）	フィンランド国立図書館（ヘルシンキ） ヘルシンキ大学 中央図書館、Learning Centre Aleksandria（ヘルシンキ）
2025/09/17（水）	イソ・オメナ図書館（エスポー） アアルト大学 ハラルド・ヘルリンラーニングセンター（エスポー）
2025/09/18（木）	ニッスニク小中学校、マサラ図書館（キルッコヌンミ） キルッコヌンミ図書館 Fyyri（キルッコヌンミ）

参加者：大学図書館職員 4 名、図書館関係企業社員 2 名

同行者：運営関係者 2 名、添乗員 1 名、通訳 1 名

## 3. 訪問記録

## 1) ヘルシンキ大学中央図書館、Learning Centre Aleksandria

ヘルシンキ大学は、4 キャンパスに 11 の学部があるフィンランド最大の大学である。今回は、City Centre Campus にある中央図書館（Main Library in the Kaisa House）と、それに隣接する Learning Centre Aleksandria を訪問した。

まず、運営面についての説明を受けたが、中でも印象に残ったのは資料購入費についてである。図書館全体の予算 2500 万€のうち、資料購入費（APC 含む）が 800 万€<sup>1</sup>、そしてその 90%を電子資料に費やしているとのことで、電子資料購入費の割合の高さに驚いた。

次に、施設見学として、まず中央図書館を見学した。

中央図書館は、2012 年に完成した地上 7 階（1 階は店舗）、地下 4 階からなる建物である。以下、2 階から 7 階について報告する。

図書館への入口は 3 階にあり、東、西、北側からの入口があるが、東側の道路に面した入口からこのフロアに入ると、上階につながる楕円形の吹き抜けにまず目を奪われ、吸い込まれるように進むと上下階へと誘うように白い螺旋階段がある。デザインが優れているだけでなく、このフロアには、カスタマーサービスカウンター、予約本書架、自動貸出機、自動返却機、検索端末、教科書書架など、よく使われる図書館の機能や資料が集まっており、利用者にとって非常に機能的に設計されている。

他の階は、各種資料、閲覧エリア、ガラス壁で区切られた閲覧室などがある。ガラス壁で

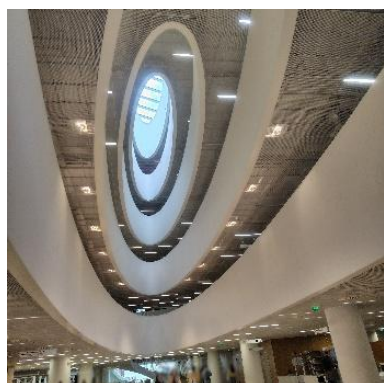
<sup>1</sup> 他は、人件費などに 800 万€、賃貸料など施設費に 800 万€、その他 100 万€とのこと。

区切られた閲覧室は、会話可能な部屋と、会話不可な部屋があり、色分けされたサインによりわかりやすく案内されている。そして、学生に人気のサービスだという Mobile storage units<sup>2</sup>が複数階に多数設けられていた。

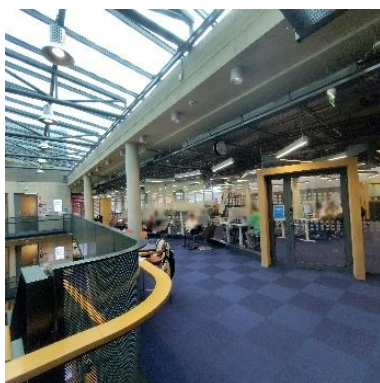
続いて Learning Centre Aleksandria を見学した。

こちらは 2025 年 7 月にリニューアルオープンをした地上 4 階、地下 1 階の建物である。リニューアル以前は、デスクトップ PC を備えた席が 200 以上あったが、このリニューアルを機にデスクトップ PC をほぼ無くし、学生の意見を元に、キッチンや子連れで利用できるスペース (Family study room) などを新たに設置し、有人の開館時間以外にも、午前 7 時から午前 1 時まで、アクセスタグにより自由に利用できるエリアを設けたという。

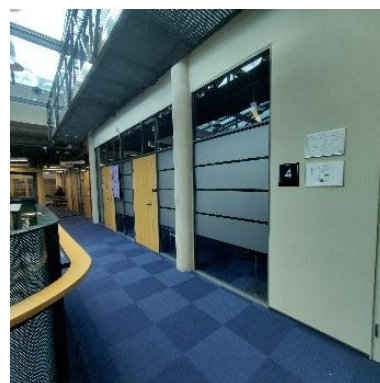
ヘルシンキ大学中央図書館、Learning Centre Aleksandria は、運営面、施設面ともに、「学習環境の提供は図書館の重要な役割」というヘルシンキ大学図書館の方針を実感できるような施設であった。



3 階から見上げた吹き抜け部分。



Learning Centre Aleksandria 4 階。  
ガラス壁により吹き抜けからの音を防いでいる。



Learning Centre Aleksandria 4 階にある Sensory friendly room。閲覧席毎に仕切りが設けられ、照明は薄暗くなっている。

## 2) アアルト大学 ハラルド・ヘルリンラーニングセンター

アアルト大学は、2010 年に 3 つの大学が合併してできた大学で、1 つのキャンパスに 6 学部がある。2012 年に、大学全体が 1 か所のキャンパスで運営を開始することに伴い、図書館も単一の拠点に集約されることとなり、2015 年にラーニングセンターベータ版として開館、リニューアルを経て 2016 年に本格始動している。なお、2018 年には「図書館」(Library) という組織はなくなり、図書館のサービスと職員は 8 つのチームに分割され、大学内の 4 つの別々の部門に配置されたという。

リニューアルを経た建物は、地上 2 階、地下 1 階となっている。リニューアルに際して、冊子体資料を 70% 弱削減し、書庫階 1 階分を減築するなどを行い、利用者のスペースを創出する一方で、大学名の由来にもなっているフィンランドの有名な建築家、アルヴァ・アアルトが設計した当初の建物や意匠などを残すという方針がとられた。

入口から続くロビーには、カスタマーサービスカウンター、予約本書架、自動貸出機、自動返却機が設置されており、利用者の利便性に配慮がされている。また同時に、入口のドアの手すり、ロビーの柱、照明など、アアルトの意匠が多く残され、入った瞬間からアアルトに魅了される空間となっている。

1、2 階には、カフェ、資料、閲覧スペース、発表等ができるスペースがあるが、それらの空間には、アアルトがデザインした什器、照明などが使われている。また、2 階はアアルトが設計した当初の建物から残されている大きな天窓があり、外光を優しく取り入れた明るい空間となっている。

<sup>2</sup> 可動式キャビネ。28 日間借りることができ、中には資料等を入れておくことができる。

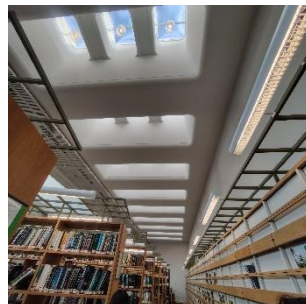
地下階と地上階では若干雰囲気が異なるものの、1 人の建築家による建物、意匠、什器、照明などが揃っている空間は、その建築家を体感できる教科書のように機能すると感じた。



1 階から地下階を撮影。会話しながらの利用が可能。



地下階の柱に残された書庫階天井の跡。まるで現代アートのように見える。



2 階。大きく設けられた天窗。



利用者にフィードバックを求めるタッチパネル。入力画面へ導く二次元コードも館内に多く貼られていた。

### 3) ヘルシンキ中央図書館 (Oodi)

フィンランド建国 100 年の記念事業の一つとして計画され、2018 年 12 月に開館した。IFLA の Public Library of the Year Award 2019 を受賞しており、ヘルシンキ中央駅から徒歩数分のところに位置していることもあってか、我々を含め多くの見学者が訪れていた。

建物は南北に長い 3 階建てで、各階にテーマが設定されており、それに沿った設備等が設けられている。

まず 1 階は「出会いの場」とされており、映画館、カフェ、自由に使えるチェステ이블、ヘルシンキ市のインフォメーションカウンターなどがある。さらに、人気のある図書が並ぶ書架、自動貸出機、自動返却機などもあり、最低限の図書館利用をスピーディーに行えるようになっている。

中央部分には、3 階まで続く螺旋階段があるが、壁には 381 の言葉が書かれている。これらの言葉は、「どんな人のためにこの図書館をささげるか？」を公募したもので、集まったたくさんの言葉の中から多様性に留意して選んだという<sup>3</sup>。

2 階は「ヘルシンキの工房」として、PC、大型プリンター、3D プリンター、ミシン、トルソー、アイロン、楽器などが用意されている。これらのものは、最初のみスタッフが使い方の概要を教え、後は自分で試行錯誤しながら利用するという方針で運用しているという。また、個室は、グループで使用するような個室の他に、音楽スタジオ、キッチン、ゲーム用個室などがある。本格的な機材を揃えているという音楽用スタジオは人気だそうだ。

3 階は「ブックヘブン」と呼ばれ、図書、雑誌、新聞、子ども用図書などがある。所蔵冊数は約 8 万冊（フィンランド語とスウェーデン語で 7 万冊、他言語で 1 万冊）とのこと。スペース分けは、北側に子ども用、中央から南側にかけて若者を含む大人用となっている。

子ども用スペースの入口付近には、ベビーカー置き場や、子どもたちのプライバシーに配慮するよう呼びかける看板もあり、子ども連れでの利用に配慮がされている。その一角にはイベントスペースとして使える部屋があり、見学時にはインタラクティブなゲームが壁に投影され、子どもたちが自由に出入りし遊んでいた。

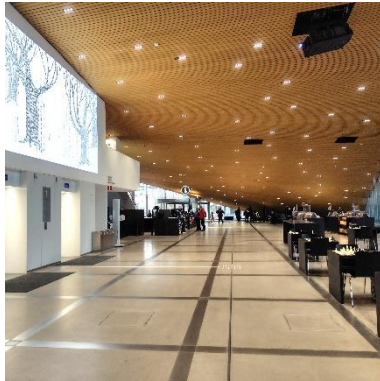
中央部分東側のエレベーター、エスカレーターからアクセスしやすい場所には、予約本書架、自動貸出機、カウンターなどが、反対の西側には、カフェや国会議事堂に面したバルコニーがある。南側にかけての大人用のスペースには閲覧机はもちろん、1 人掛けの椅子なども置かれており、思い思いに時間を過ごせるが、講演会ができるような空間も設けられてい

<sup>3</sup> ヘルシンキ中央図書館のウェブサイトには、ここにどんな言葉が書かれているかを、10 か国語で紹介したページがある。日本語のウェブページ URL は次のとおり。[https://oodihelsinki.fi/omistuskirjoitus/?omistuskirjoitus\\_lang=ja](https://oodihelsinki.fi/omistuskirjoitus/?omistuskirjoitus_lang=ja)。(参照 2025-11-17)。



た。

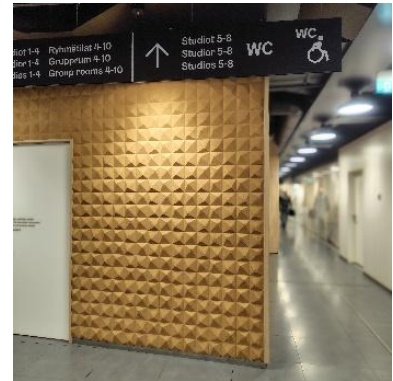
書架の高さは150cm程度と低く、ある程度全体が見渡せるので、「あちらには何があるのだろう、行ってみよう」という行動につながるように思えた。また色は白で統一されており、天板裏手前側にはライトが設置され、資料を照らしている。このことにより、色彩豊かな資料の背や表紙が目立ち、「本が主役」の階になっていたように思う。



1階。中央付近から南方面を撮影。右手前にはチェステール。右手奥には人気のある図書の書架。左手はヘルシンキ市のインフォメーションカウンター等がある。



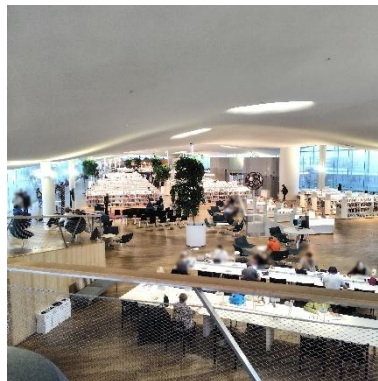
2階ゲーム用個室。主に子どもが使用することを想定し、壁は透明となっていて、安全面での配慮が感じられる。



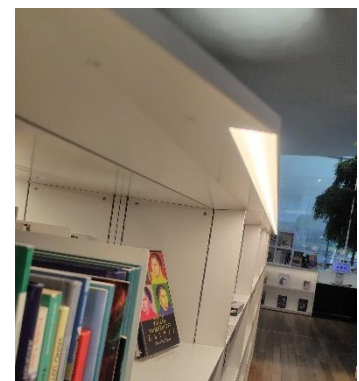
2階音楽スタジオの壁（外側）。吸音性の高い素材が使われている。



3階子ども用スペース。木材がふんだんに使われている。



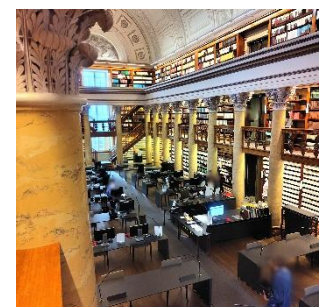
3階大人用のスペース（南側）から全体を撮影。天井の形状は物音を吸収する効果もあるとのこと。



3階書架。天板裏手前側に照明があり、資料を明るく照らしている。

#### 4) フィンランド国立図書館

その起源は1640年設立のトゥルク王立アカデミーまでさかのぼるフィンランド最古の学術図書館である。カール・ルートヴィヒ・エンゲルにより設計された建物で、1845年に完成、2013年から2015年にかけて修復工事が行われた。中央の閲覧室を挟んで、北側の閲覧室にはマイクロ資料とその閲覧スペースが、南側には研究者専用の閲覧室がある。この建物はエンゲルの最高傑作の一つとされるだけあり、見学者が絶えず、騒音とまでは言えないものの、ある程度の物音がしてしまうため、研究者への配慮という点からは悩ましいところだという。



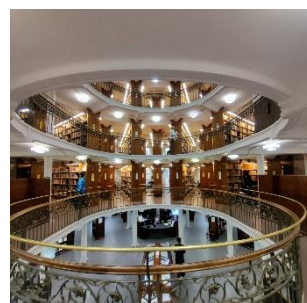
北側閲覧室。

西側にはグスタフ・ニューストロムが設計した「ロトンダ」と言われる別館がある。こちらは当初書庫として設計されたもので 1906 年に完成した。

こちらでは、国立図書館における電子化についてと、持続可能な開発をするために行ったワークショップについての説明をいただいたが、前者について、以下に簡単に紹介する。

現在すすめられている資料の電子化は、毎年 200 万～300 万ページを電子化しており、作業はミッケリ支部で行っているという。ミッケリでの電子化作業は 37 名で行っているとのことだが、ボランティアなどはおらず、その理由は「電子化作業のコンセプトの理解や資料の扱いについて、十分な共通認識を持つことが難しいため」とのことだった。また、一口に電子化といっても、実際は現物の修復から始まることもあるということ、品質保証の観点から作業後のデータ確認までも含む幅広い作業があること、電子化対象資料は大量にあり、電子化への希望も多く寄せられる中で、「資金が十分か?」「機器・ソフトウェア、関連する専門知識にどこまで対応できるのか?」などの課題を抱えながら取り組んでいることなどの説明があった。

このような電子化作業は、国内のみならず、世界の研究者に恩恵をもたらすものであるが、それぞれの資料と向き合い続ける地道な作業の上に成り立つものであることを再認識した。



別館「ロトンダ」。書架や閲覧席が並び、現役の閲覧スペースとして使われている。

## 5) イソ・オメナ図書館

イソ・オメナ図書館は、地下鉄マティンキュラ駅に直結しているイソ・オメナ・ショッピングモール 3 階にある公共図書館である。図書館サービスだけでなく、各種の行政サービスも提供している複合型施設となっており、この形での運営は 2016 年 8 月当時の市長のアイデアで始まったという。

ショッピングモールの 2 階からエスカレーターを上ると右手すぐ近くに、予約本書架、自動貸出機、自動返却機があり、利用者に便利な配置となっている。

図書館機能としては、子ども・若者向けのスペースと大人向けのスペースがあり、それぞれが両端に存在している。また、3D プリンターやミシンなどを備えたメーカースペース、音楽スタジオ、楽器やスケート靴の貸出など、フィンランドの公共図書館では一般的であろうサービスが行われている。

書架の高さは全体的に低く、160cm 程度の高さとなっているため収容冊数は多くはないが、大人は所蔵検索をし、取寄予約をしてから来館しているので、その点はあまり問題視していないようだ。また、書架は可動式となっており、配置は利用状況を見て適宜変更しているという。壁や床などには緑やオレンジなど鮮やかな色が多く使われているが、汚れが目立つのになかなか掃除の時間をとれないということで、もう少し汚れが目立たない色にしてもよかったかもしれないという言葉も聞かれた。

図書館以外には、出産・子育て支援センターの「ネウボラ」<sup>4</sup>、若者支援スペース、メンタルヘルス・薬物依存症クリニックのカウンセリングルームなどが設けられている。

これだけ多様な機関、サービス提供があると、別の機関のサービスがよくわからないということが発生するのではないかと質問したところ、ここの業務に携わる全員で会議をしたり、親善パーティーをしたりしながら、安全上必要なことや、どこでどんなサービスを行っているかをお互いに共有し、案内ができるようにしたとのことだった。ただ、サービスやその提供の仕方をもっと共有し、お互いを組み合わせなどの工夫ができたのではないかと反省

<sup>4</sup> 「アドバイスの場」という意。フィンランドの子育て支援の一つ。概略は次を参照。“フィンランド在日大使館の子育て支援ネウボラ”。フィンランド大使館。 <https://finlandabroad.fi/web/jpn/ja-finnish-childcare-system>, (参照 2025-11-17)。



もあるそうだ。

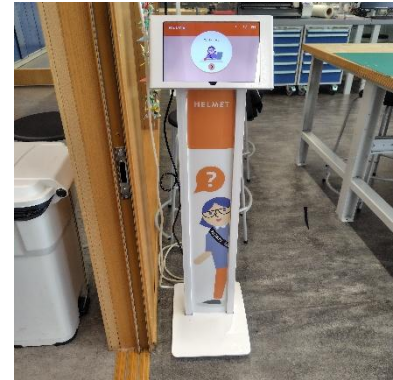
住民として、1フロアに図書館と他の行政サービスが共存しているという施設を利用したことがないので興味深かったが、「図書館」と書かれたカウンター間口が狭く、また、そこに常時スタッフがいるわけではないことに特に驚いた。しかし、ここでは、スタッフが定位置にいて質問を受けるというより、スタッフが歩き回って来館者に声をかけるというスタイルでサービスを行うことにしているとのこと、あちらこちらに図書館のそれとわかるベストを着たスタッフがおり、また、スタッフを呼ぶタッチパネルもあることから、利用者が困ることはないように思えた。



中央部にあるイベントスペース。見学した日には、シニア向けのエクササイズ教室が開催されていた。



中央部にある各種カウンター。図書館のカウンターは、左端の白い壁の前にある。



スタッフを呼び出すタッチパネル。図書館のカウンターからは見えにくい場所にあるメーカースペースにあるもの。

## 6) キルッコヌンミ図書館 (Fyyri)

キルッコヌンミ図書館は、ヘルシンキ北西のキルッコヌンミ市にあり、「灯台」を意味する Fyyri (フューリ) と呼ばれる公共図書館である。5) のイソ・オメナ図書館と同様複合施設で、青少年課など5団体が活動をしているという。

3階建ての建物で、1980年代に建てられた図書館の周りを取り囲む形で増改築し、2020年に完成した。面積は増改築前の2倍ほどになり、今回見学した1階と2階には、閲覧室のほか、カフェ、子どものためのスペース、若者のためのスペース、キッチン、ホール、展示室、メーカースペース、音楽スタジオ、読書階段（階段上のスペース）などがあつた。

増築した部分にイベントを行うスペースができたこともあり、年間100以上のイベントを行っているそうだが、おなじみのイベントの一つが読書介助犬のイベントだという。このイベントは、訓練を受けた犬が子どもたちの読書を聞くという活動である<sup>5</sup>が、今後は母語がフィンランド語でない方向けに行ってもよいのではないかと話し合っているそうだ。また、その理由とともに特徴的だったのが、Digicaféというイベントである。主にシニア層を対象にしているものだが、フィンランドにおける行政手続き等が、ほぼデジタル化していることもあり、電子機器に慣れないシニアをサポートするようなイベントを開催しているとのことだった。

<sup>5</sup> 詳細は次を参照。“Reading Education Assistance Dogs® (R.E.A.D.)®”. Intermountain Therapy Animals. <https://therapyanimals.org/read/>, (参照 2025-11-17).

建物内には、少人数で使用することが想定される個室やホール以外には、ドアがほとんどなく、絵本やちょっとした遊び場がある子ども向けスペース、卓球台などが置かれている若者向けスペース、雑誌や図書が置いてある大人向けスペースを容易に移動できる反面、音の問題は発生しているという。平日の午後に訪問したが、幼児や小中高生と思しき若者も多く来館しており、多様な利用者がいることは喜ばしいであろうが、施設運営者としては、相互理解を促す努力が必須であると感じた。

音の問題はあるにせよ、主に大人が使用すると思われるスペースはとても心地よい空間となっていた。雑誌コーナーにはカフェが併設され、向かいにある教会にむけて全面ガラス張りとなっており、明るく開放感がある。図書が置いてある閲覧室は、高い天井、自然光が降り注いでいるかのような照明、やわらかい色合いのカーペットや什器など、北欧の公共図書館は「市民のリビングルーム」とも称されるが、その言葉にふさわしい空間になっているように感じた。



図書が置いてある大人向けの閲覧スペース。

## 7) ニッスニク小中学校とマサラ図書館

ニッスニク小中学校はキルッコヌンミ市マサラ地区にある小中学校で、約 570 名の生徒が通う。現在建て替えをしているため、仮校舎を訪問することになった。

国語教員より、フィンランドの児童・生徒たちの読書の実情（二極化が進んでいる）や、どのような読書推進活動を行っているか、また、公共図書館との連携等について説明を受けた。

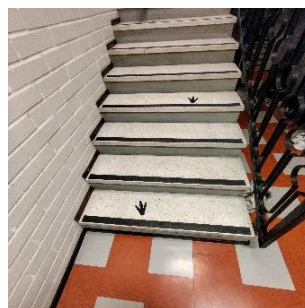
次に、隣にあるマサラ図書館で、フィンランドの公共図書館では実施されていることの多いセルフサービス開館について話をきいた。セルフサービス開館導入のきっかけは人件費の増加だったとのことで、開始に向けては、作家のトークショーなどのイベントを行い、その一角でセルフサービス開館を紹介するなどの周知活動を行ったという。なお、セルフサービス利用希望者には利用規約を読んでもらい、承諾した人のみ利用可としているとのことで、スタッフ不在時間の事件や事故の発生については「幸い今まで大きな問題は起きていない」とのことだった。

小中学校の建て替えにあわせて、図書館も小中学校と同じ新しい建物に入るそうだが、図書館の面積が狭くなるため、蔵書構成を児童書、ヤングアダルト資料中心とし、大人向けの資料は減らす予定だという。その理由は、大人は所蔵検索をし、取寄予約をしてから来館する傾向にあるためだそうだ。

施設や什器などは最新のものではないが、セルフサービス開館の実施や、自動貸出機、自動返却機を設置するなど、他の図書館と遜色ないサービスを提供していた。加えて、小中学校生が教室としても利用する図書館であるからか、鮮やかな飾りつけや、階段に動物の足跡がプリントされているなど、大人でも楽しくなるような工夫をしていたのが印象的であった。



館内の鮮やかな飾り。



動物の足跡がプリントされた階段。ここを上った先で、外国語を母語とする児童たちの授業を行っていた。

## 8) アカデミア書店

ヘルシンキにある老舗書店で 1893 年に設立された。現在の建物は、アルヴァ・アアルト設計のもので 1969 年に完成しており、1F と 2F が店舗となっている。

「人と本が、人と人が、出会うところ」というコンセプトでスペースづくりを考えているとのこと、1 階にある 2 か所の入口からの通路が交わる場所に、ベストセラー本を置くことで、「人と本が出会う」場を作り、レジ前にソファを設け、待ち合わせに使えるような空間にすることで「人と人が出会う」場にしているという。また、このスペースの一角にあるステージでは、作家を招いたイベントなどを行っており、これも同様に機能しているようだ。

中央部分は吹き抜けとなっているが、天井には本を開いた形をモチーフにしたガラス窓があり、外光を店内に届けている。2 階の吹き抜け周りには 90cm 程度の高さに本が平積みされておりとても見やすい。日本の書店と少し異なる点は、図書を紹介するポップが無い点だ。公用語 2 か国語（フィンランド語、スウェーデン語）と英語の 3 か国語を表記するのが一般的であるというお国事情もあるかと推測するが、ポップがない分、自然と図書の表紙に目が行き、一つ一つの資料をじっくりと見せる効果があるように感じた。



2 階吹き抜け周りの陳列棚。腰高で見やすい。奥には日本の映画にも登場したカフェ・アアルト（Cafe Aalto）がある。

## 4. おわりに

今回の研修で得た気づきとして、以下を挙げたい。

まず、スペースの使い方として、入口近くやアクセスが容易な場所に、予約本書架、自動貸出機、自動返却機を置いている点が、貸出を行っている図書館において共通していた。短時間で用事を済ませることができるという心理的負担感の軽さが頻回の来館、利用にもつながるであろう。

次に、冊子体資料数の抑制、削減をし、利用者のスペースにするという流れである。これは資料購入や保存にも関連するが、ヘルシンキ大学図書館の資料購入予算に占める電子資料購入費の割合の高さや、アアルト大学ハラルド・ヘルリンラーニングセンターリニューアル時の大胆な蔵書数削減と利用者スペースの創出にみられた。国により取り巻く状況が異なりはするが、視野に入れていくべき方向性であろうと考える。

最後に、利用者の声を聴き、取り入れる姿勢である。ヘルシンキ大学 Learning Centre Aleksandria では、学生の希望により取り入れられたキッチンやファミリールームがあった。また、アアルト大学ハラルド・ヘルリンラーニングセンターでは、利用者にフィードバックを求める二次元コードが館内各所に貼られていた。これらからは、利用者のニーズにより変わっていくことを恐れない積極性を感じた。

以上、大学図書館を中心に述べたが、利用者として関わる公共図書館への関心も高まった。今回得られた沢山の視点は、業務に取り組む中で関係者と共有し、利用者へと還元させていきたい。

以上

### \*参考文献

1. 吉田右子, 小泉公乃, 坂田ヘントネン亜希. 『フィンランド公共図書館：躍進の秘密』. 新評論, 2019, 258p.
2. 小泉隆. 『北欧の美しい図書館』. エクスナレッジ, 2024, 223p.
3. gestalten 編. 『世界の図書館を巡る：進化する叡智の神殿』. ヤナガワ智予訳. マール社, 2023, 295p.

\*本報告書の写真は、すべて報告者撮影。